

Title	<大會抄録>日唐軍制比較研究上の若干の問題：軍防令と西域出土文書
Author(s)	菊池, 英夫
Citation	東洋史研究 (1977), 36(3): 488-488
Issue Date	1977-12-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/153661
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

ルでの客観状況を掌握し、地域間の比較、さらには全國規模での議論のための一現實モデルを提供しようと思う。

日唐軍制比較研究上の若干の問題

——軍防令と西域出土文書——

菊池英夫

日唐兩國制度の研究、特に律令研究が相互の比較史的觀點および史料の相補の利用によつてはじめて成果を擧げうるというのは、古くからの斯界の常識である。軍防令を中心とする唐代前半期の軍制について云えば、仁井田陞博士の『唐令拾遺』（昭八）中の軍防令復原は全條に互つてこの方法を採用され、濱口重國博士の『府兵制度より新兵制へ』（昭五）も隨所に日唐兩制の比較に言及されている。しかしその後の研究の展開を通觀すると、日本史研究者が律令制度を論ずる際に必ずと云つてよいほど母法たる唐令に言及するのに對し、中國史研究者は日本律令制度研究の進展に比較的無關心であつたといえる。ひとつには、石尾芳久氏が「名望家軍」と「家産制的國家軍隊」という概念の枠組で日唐兩制の比較を試みたのを別とすれば、日本史研究者の關心が、遡つて大化前代以來の傳統社會の固有軍制と律令軍國制との連續性如何という軍國制成立史論となるか、或は軍國制崩壊すなわち律令軍制の變質から、在地軍事力の構造と、それを九世紀以降の國衙軍制が如何に編成するかを通じて、いわゆる王朝國家體制と武士團發生史を見通すという、日本的特質

の解明に集中し、およそ唐制とは無關係な方向を示すかに見えたからでもある。しかし日本史家の一部によつて、まさに日本的特質として論ぜられている特徴の中には、實はそれこそが唐制の一大眼目であり唐制本來の姿を寫し出していると云うべき諸點が少からず存する。このことは、日本史・中國史雙方にとつて更めて顧みらるべき問題點を提起すると思うが、それが日本的特質との結びつけられるのは、ひとつには日本史家の間に唐制に對する誤解があるからで、仁井田・濱口兩博士の研究では問題限定の上から敢えて觸れずに捨象された側面のあることが注意されていないのである。兩博士の業績が偉大であるだけに、そこに述べられただけがすべてと受けとられた。かくて専らそれに依據した日唐比較論を展開された角田文衛博士の論文が今日も廣く影響を與えている。最も問題となる點は、中央十二衛と軍府の制度的關係および實戦力の發動としての「行軍」（日本史家のいわゆる征討軍・外征軍）の位置づけである。唐の行軍制度は西域出土文書によつてはじめて解明しうる點が大きく、仁井田・濱口兩博士の研究から漏れていた點があるが、逆に日本發老令文中に多く關係條文が存し唐制復原に役立てうる。しかし從來それが「行軍」という獨立の組織規定である點が見失われていたため見逃がされてきたのである。又日本軍防令を手がかりとする唐令復原に際しても、西域出土文書を傍證として活用することにより確實さを増しうる場合のあることに注意したい。最後に近年吐魯番出土の軍制關係文書の一つについて試釋をつけ加えて御批判を仰ぐこととする。